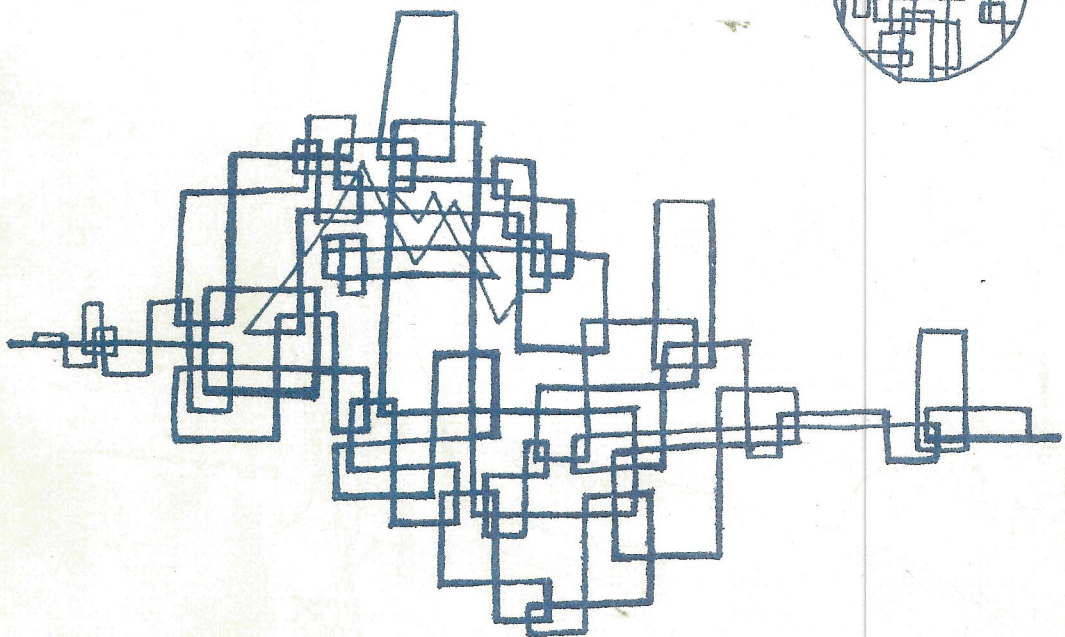
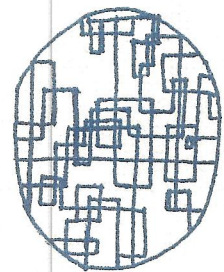


甲子日

神戸大学教職員組合教養部支部通信

No. 12.13 1972 春



『鶴甲剣友会』占描

森 晴 秀

数年前から「教養部剣友会」という同好の士の集まりがあったが、武道場の完成に際して、このたび本会は標題にある通り改称し、初代会長に河合敏行（7段教士）、師範代に笈寿雄（5段）、幹事に福原平義（3段）、会計に江本一行（実力は3段。デートが忙しいらしくて（？）一向に昇段試験を受けに行かぬが、つべん行ってもらいたい）の諸氏を役員として、46年秋に改めて発足した。会員数は年を経るに従って増加し、現今では役員の外に7名を数え、合宿強化訓練年2回、普通の稽古は毎週土曜日午後1時から3時まで、学生も加わって行われている。

毎週の稽古は例外なく、竹刀の握り方、足の運び方、気合いのかけ方、呼吸の仕方、といった初歩から始まって、練習仕合に到るといふ具

合に、河合師範の場合も笈師範代の場合でも、初心を常に忘れぬように、キメの細かい科学的な指導が段階を追ってなされているから、いつ入会されてもその場で叩きのめされるような恐れは絶対がない。河合師範は特にその点に注意しておられるようで、実は徹底的に締めあげておられるのだが、初心者を騙しだまし、やんわりとやられるのでそれに仲々気がつかぬ。笈師範代も最近は上手に相手を騙されるので、筆者などはしょっちゅうしぼられている。

剣道はそもそも礼に始まり礼に終る。相手の人格を尊び、自己の人格の完成を目指す、それだけではない。厳しい稽古による自我の発見とその確立の次には、確立された自我の積極的な否定と滅却がなければならない。忘我の境地に立って、「ボン」と無心に相手を打つ我れも、

打たれる相手も、竹刀も、板の間も、もはや消え失せ、全ては渾然と宇宙の全存在と融和する。剣道をやっていることなどすっかり忘れてしまっている。それを忘れた自分も存在せず、大空間に「ポン」という音だけが流れる。しかしそれだけでは、独りよがりな桃源郷にすぎず、道場の外の世界で我れにかえった時、無の世界に帰した我れは、他者のために存在せねばならないのである。この精神は剣道に限らず、柔道、書道、茶道、華道等の、日本古来の文武両道に通ずる禅の本質である。

禅といえはすぐに「鞍上人なく、鞍下馬なし」とか、「うつすとも月もおもわず うつすとも水もおもわぬ 広沢の池」ということになるのだが、これが禅の最終目標ではない。最後の段階は、存在を忘れた自我と、存在を忘れた他人の自我との全ったき関係の確立である、言々……と、まあ、小理屈は筆者はよく分っている積りなのだが、こんな下らぬことをゴタゴタと書いたりしている中は、結局は何んにも分っていないのである。

そもそも場内における「ポン」が、何ともうまいかんだ。これでは外へ出ても他人様のお役に立てるのかどうか。逆に「ポン」とやられた口惜しさに、思わずさかづきをにぎる左手に力が入ります。竹刀は左手でにぎります。その訓練なれば、道場の外で毎日やっております。従いまして、悔し涙にくれる自我と、他人様の自我とは、結構仲良くやっているようであります。

閉話休憩。寒暑を通じて薄着で行うために、

剣道をやると皮膚が強くなり、胃腸によく、耐久力が出来てくる。不眠症は直り、あらゆるストレスが解消する。呼吸さえのみこめれば激しい運動とは思えなくなるので、老若男女だれにでも出来るスポーツである。90才にして公式試合に出場する人すらある。(元来たくましい筋骨を誇られる小西美典氏は40才を過ぎてから剣道に親しまれ、たちまちの中に腕をあげて、最近3段へと進まれたぐらいである。)容ぼうはさておき、姿勢は自づから端麗となり——筆者はまだ猫背です、スママセン——生活意欲は旺盛、特に頭が飛躍的に良くなることは、剣道部の学生によって証明されている。そのこととは関係はないのだが、湯浅光朝博士が今回初代名誉会長に就任される予定である。また、中川努評議員は終身賛助会員第1号となられ、道場の内外でいろんなものの「にぎり方」について指導されることになっている。部長、評議員の頭を一度ポカリ、と狙っておられる御仁があれば、好機正に到来である。道場においては合法的にやれる筈だ。但し、道場に一步でも足を踏み入れた瞬間、そのような邪念はたちどころに消え去る。それが「道」と名のつくものの妙味である。以上、左手の自由を奪われつつ書いた。個人的に失礼の段、あれば御寛恕を願い上げる。